

◎踊りの経歴書

2016.6.9 坂本修三

兵庫県技術士会の皆様の前で、何回か私の「踊り」を見ていただく機会がありました。しかしどうして踊りに魅せられ、のめり込んだか、この機会に踊りの経歴書としてご紹介させていただこうと思う。

平成17年に技術士資格の文科省試験に合格。3年後には坂本技術士事務所を開所して当会にも入会した。それ以降初対面の方と交わす名刺の数が会社現役時以上の勢いで増えて、新しい出会いが再スタートした。名刺を交わす多くの方が「技術士事務所」名または一流企業名の名刺で、見た感じ上もいかにもお堅いイメージでガチガチ（と勝手に思い込んだ）の「技術士」名義の名刺であった。その当時、既に趣味としての踊りが習い始めて10年を過ぎていた。十分な技量が有るから「名取資格」に挑戦すれば、と指導を受けていた日本民踊研究会所属の師範先生から推薦を受けたこともあって、堅苦しいイメージの「技術士事務所」名刺に、ソフトな雰囲気表現できる「名取号」をなんとしても印刷したいと強く思い、取り組むことにした。

さて私の子供時代は、奈良市郊外の自然に囲まれた要はいなか環境の中で、山を走り回っておやつを探し、川で小魚を探しておかずに持ち帰り、また友人とボールを追いかける落ち着きのない三男坊のスポーツ少年。夏になると近くのあやめ池遊園地グラウンドで開催される恒例の大規模な盆踊り大会や、家の近くの地藏盆で行われる盆踊りを、恥ずかしそうに、でも好奇心一杯に眺めるだけの少年であった。次に中学時代は器械体操部の床、鉄棒に一生懸命になった。団塊世代で競争に落ちこぼれないよう理系クラスで勉強に明け暮れた高校時代。その反動で真っ黒に日焼けしてボールを追いかけた大学時代のサッカー中心の生活。どう考えてもスポーツしかできない平均的な理系の男子。

昭和45年、「サッカー部分科会卒業です！」との面接時の自己アピールが効いたのかグンゼ株式会社に入社。赴任先は鳥取県倉吉市のファンデーション（事）倉吉工場。女性下着の一貫製造工場染工課に配属されて社会人スタート。100名を超える寮生が居た倉吉工場男子寮時代に、寮生仲間との酒の話の勢いと突然の思いつきで、何故か数名が市内元色街に練習場をお持ちであった日本舞踊のお師匠さんに踊りを習いに通うことになった。仲間がポツリポツリ抜ける中、一人になるまで通ったが、二交代勤務職場の制約もあって自然と足が遠のき、残念ながら一年余りで踊り通いを断念。しかし数年後、私の結婚式披露宴で、司会者であった友人から突然かくし芸披露を指名され、最初に習った曲「黒田節」を、出席者であった元踊り仲間のアカペラで演舞を披露。何とか踊ったが、中途半端で反省ばかりが強く記憶に残った。これが踊りとの最初の出会いかつそれっきり。

さて約20年間の長い空白期間を経て平成6年に、居住する西脇市の町内会「納涼まつり（盆踊り）」で、抽選で当たって回ってきた役員として行事の世話をしつつ、教わったばかりの手振り足振りで盆踊りを飛び跳ねた。その姿を見て声を掛けてくれたのが、同じく

世話係であった複数のお姉さん(おばさん?)。「踊りを習ってみる?」との問い掛けに、「習う!」と即答したのがそもそもの私の踊り人生の始まり。やっぱり好きだったのでしょう。グループでは男は一人黒一点だが、近くに在住の師範先生から習い始めて、なんと23年目に入る。簡単な盆踊りから、舞台用の見栄えがする演目や編成で見せる踊りに順次難度も上がり、レパートリーを増やしてきた。一時10名のグループ員も年齢的な自然減で現在は5名。(国内の繊維業界と同じで、衰退イメージは否定できない。)

実は当初から踊りの練習は月に2回で、夜の20時から2時間のみ。家庭の奥さん相手のこの珍しい時間帯の練習こそが、私が管理責任者であった難しい立場でも、どんな仕事の事情がからんでも、たとえ日帰り出張があっても、ほぼ休むことなく練習を続けることができた理由であった。この間色々経過も有るが、精神的な拠り所になったのは間違いない。そもそも育った家庭環境が8人兄弟の6番目で三男坊。女姉妹が5人ですぐ上と下が姉と妹。しかもグンゼ時代は女子寮生500名規模の工場生活。職場環境も女性が多い繊維の世界のため、女性に気後れせずまた意識過剰にならずに済んだことが、なんといっても女社会である踊りの世界に、無理なくなじめた理由だと思っている。

さて日本民踊研究会での名取資格取得には、師範先生の日常指導を受けて、「人格、技量ともに名取の資格にふさわしいと認められる者であること」との条件がある。そして踊り課題曲の実技試験と学科筆記試験がある。幸い一度の挑戦で合格したが、費用が掛かるのも事実。白塗りで一人踊りを主とされる日本舞踊や歌謡舞踊などの他流派では、名取資格料は数十万円またはそれ以上とも言われる。割安とはいえわが流派もそれなりの費用は必要。「名取号」を允許(いんきょ)され、その後の精神的な満足感を考えると高くはない。かといってこの趣味を持たない人と比べると決して安くもない。また「名取」資格以降も「準師範」、「師範」への道が残るが、私には踊りの先生として生徒を育てるセンスにも才能にも限界があると見切り、趣味の「名取」取得で大満足して終了した。現実的にはそれぞれウン十万円のさらなる資格料と人生の満足感とのバランスを考えた結果でもあった。平成20年1月に名取号「坂本とよ美修(とよみしゅう)」を允許されて後、裏に印刷した名刺を約400枚交換した。しかし初対面の席上で名刺裏に記載した「名取号」に気がついて話題にされた方は、記憶にある限りはたったの3名。ウーン、まったく残念。しかし自分が手渡した名刺裏に、この秘密を刷り込んである楽しみはなんとも愉快至極である。

平成27年、人前で踊りを披露した回数は計20回。内、養護施設などのボランティア13回、大小舞台出演6回。今後は鳥取県三朝町に帰省する度に、地元養護施設に恒例の慰問ボランティアを予定。秋には大阪市や加東市で大きな舞台が待つ。慰問ボランティアの話も次々舞い込み、忙しく一年が過ぎていく。私達の踊り会は基本的に入場無料。今年も色々企画されて予定有り。ご要望あれば関連予定をご案内致します。お気軽にどうぞ。

以上